

# 道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会  
事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2  
北海道開拓記念館内  
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

## 平成13年度学芸職員部会の活動から —25年間を振り返りながら—

昭和51年1月24日、学芸職員部会の発足にむけて、その草案作りが札幌周辺の学芸員により開始された。その中心的役割を担ったのは北海道立近代美術館学芸員の武田厚（現横浜美術館）さんでした。昭和52年6月9日、清水町で開かれた第16回北海道博物館大会において、学芸職員部会設立が議決、代表世話人に故澤四郎さんがなされた。同年7月28日に部会の設立総会が開かれここに学芸職員部会が産声を上げました。

第1回学芸職員研修会の会場は開館したばかりの北海道立近代美術館でした。テーマは「北海道博物館百年を考える」で、関秀志さん、米村哲英さん、千代肇さんがそれぞれ話題提供をなさっております。そして、澤四郎さんが「北海道博物館二世紀に向けて果たすべき学芸員の役割」と題したお話をしております。手元にこの時の情報が無

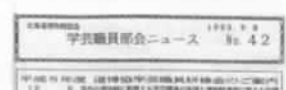
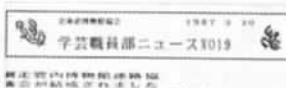
いのでどのような展開になったのかは分かりませんが、学芸職員部会の今に繋がる活発な論議がなされたことは想像できます。

『地域』を視座にしたのは美幌町で開催された研修会が端緒でした。「地域における博物館の果たす役割」をテーマに5名の会員から事例をもとに提言がなされました。今日的な課題を捉えた研修会でした。現在進行形で続いている『地域学のススメ』のテーマ設定は、平成4年に上士幌町で開催された研修会が原形となっています。地域学という文言が初めて研修会に登場しました。それ以来、その土地にあってさまざまな分野で活動を行なっている人たちによって、私たちに多くの情報を提供していただいております。

平成13年度の研修会は平取町で開催されました。沙流川歴史館をメイン会場に8月30日から31日の2日間、地元の方々の心のこもったご協力を得ながら充実した研修会を行なうことができました。佐々木高明さんの講演と日高管内各8町の学芸員による事例報告、平取アイヌ文化保存会の皆さんによる実技体験講習「民族舞踊」、さらに萱野茂二風谷アイヌ資料館長萱野茂さんの展示解説と講話など盛りだくさんの内容でした。

「多文化時代の博物館」と題した佐々木高明さんの講演は、21世紀、これからの博物館にはどのような役割と機能が期待され、どのような特色の創出が必要なのかを、20世紀の歴史を振り返り今後の動向を展望する、佐々木さんの考えをお話しくれました。講演の締めくくりとして、「21世紀の多文化時代を生きる我々にとって、そのアイデンティティを確かめるためには、グローカリゼーションの動きの中で、地域の情報発信センターとしての博物館の機能がきわめて大きいことを確認しておくこと」の必要性を説かれた。そして、

### 学芸職員部会ニュース



学芸職員部会ニュース

事例報告は報告標題を挙げると、「生物誌～動物」（えりも町郷土資料館・中岡利泰さん）、「アポイ岳における高山植物の現状と課題」（様似町教育委員会・田中正人さん）、「新冠の地史」（新冠町郷土資料館・新川剛生さん）、「山の成り立ちと山脈館～研究者とかかわり」（日高山脈館・小野昌子さん）、「三石の郷土芸能」（三石町教育委員会・小野寺聡さん）、「国指定史跡メナチャ

シ跡殿損事故への対応」（静内町郷土館・齋藤大朋さん）、「日高西部における縄文時代早期前半の集落址について」（門別町図書館・郷土資料館・川内谷修さん）、「日高東部地方の縄文早期前半の集落と土器群について～特に西舎遺跡群の事例から～」(浦河町立郷土博物館・川内基さん)と、まさにサブテーマである「自然と文化の多様性・複雑性を活かすミュージアム」そのものでした。

平成14年度学芸員研修会は、発足以来初めて島に渡ります。6月6日、7日の二日間、利尻島で開催される研修会のテーマは「地域学のススメー離島編ー地理的特色を活かすミュージアム」です。

(学芸職員部会 矢吹俊男)



北海道新博物館ガイド

## 博物館ボランティアと特別学芸員

当館には、学芸員がひとりしかいない。それを補うために昭和58年に特別学芸員を制度化した。メンバーの職種は、教員や民間人などで郷土史や趣味などその道の知識人たちである。当初から、博物館の専門家としての自覚を持ち熱心に調査研究をしてくれた。自分の趣味や特技が博物館の実績となり、成果が研究報告や展示物などの何らかの形として残ることにやり甲斐を感じていた。これに対する報償は、わずかばかりの年間を通しての活動謝礼だけである。まことにありがたいことだ。ところが、15年を過ぎた頃から転勤や死去により人材不足となり、補充がままならなくなってしまった。

博物館ボランティアは、平成13年4月にやっと会として立ち上げることができた。五年ほど前から、募集を始めたが、集まらなかった。養成講習会などもしてみたが、少数の熱心な人たちだけで全然集まらなかった。最近ようやく口コミにより30名ほどになった。メンバーの構成は、主婦から高齢者までさまざま、目的もそれぞれ違う。野草の名前を覚えたいのか、自然の中を歩きたいとか。それぞれの会員にそれぞれの思いがあ

る。どうも札幌や旭川などの大都市で活動するボランティアとは違うようだ。だから一つの団体として組織するのは困難であった。発足にこぎ着けられたのは、前館長が退職後、会長を引き受けてくれたからだ。しかし、あくまでボランティアなのでその活動に館から強制は出来ない。歯がゆいにはあるがあくまで本人の自覚を促し、やり甲斐を待って活動してもらうしかない。また、館からも発足したばかりなので、運営にも協力しなければならぬし、おもしろく飽きの来ない活動も提供しなければならない。とりあえずは、どんなことをしているかと言えば、研修をかねて自然観察会や歴史講座などの講座のサポートやテーマ展などの展示会の手伝いなどである。

この二つの事業に関係する画期的なことがあった。ボランティアから特別学芸員が誕生したのである。生涯学習の世の中でこれは究極の出来事ではないだろうか。学芸員とて初めはただの人であり研究努力と経験を積んで学芸員として認められる。それが一般の人でも実現する道筋をつけたのである。博物館が人材を育成する施設であることを実感した。

(士別市立博物館 学芸員 水田一彦)

### 網走管内博物館連絡協議会 平成13年度個別研修報告 (訓子府町)

今年度の個別研修は、12月12日に訓子府町公民館で開催され、管内の関係者28名が参加しました。

研修テーマは「北海道における民俗調査－訓子府町の調査をとおして－」と題し、北海道浅井学園大学教授小田嶋政子氏にお話を伺いました。

これは、訓子府町の生活と文化を探るために平成8年度から13年度にかけて実施した「民俗調査」において、準備段階から報告書作成までを担当していただいた訓子府町民俗調査団の一人である小田嶋先生に、北海道における生活文化の調査について、また、聞き取り調査の意義や方法についてお話をさせていただくというものでした。

主な内容としては、北海道は様々な土地から人が移り住んでいる「移住地」であるということから、一般的には歴史が浅く伝統的文化を持ち合わせていないように思われがちである。しかし、「文化」とは私たちの日常生活そのものであり、地域によって違いはあるものの、北海道も立派な文化を持ったところであるということです。

このように、「民族」ではなく「民俗」の調査

では人々の日常生活こそが「文化」であるというおさえで、普段何気ない私たちの暮らし方にこそ目を向けていかななくてはならないとのことでした。

調査方法の主体となった「聞き取り」については、古文書や日記などの文献に記されていない開拓の歴史や、先代の生活の様子が言い伝えられていることがあり、聞き取りをする相手の記憶の状態によっては、膨大な文献にも勝る価値のある話が聴ける可能性があるということも教えていただきました。

さらに、対話形式で行われる「聞き取り」には、できるだけ「地元の言葉を聞き取る」という目的があり、言葉に含まれる意味や微妙なニュアンスをも知ることができるそうです。

しかし、生活様式の変化や世代交代が進む中、人々の貴重な記憶や資料（写真や日記など）は確実に失われつつあるため、今こそ総合的な調査を行うことによって、人の生活・時代を縦と横に繋ぐ作業が必要であるとのことでした。

今回の研修内容については、博物館の業務や事業と直接関係はなかったものの、「地域における文化は地域が守る」という視点から、教育行政の取り組みべき一例として、たいへん有意義な講話をいただきました。

(訓子府町教育委員会 社会教育課 佐藤貴裕)

### 平成13年度北海道美術館 学芸員研究協議会報告

平成13年度の総会・研究協議会は平成14年の3月7日、8日の両日、北海道立近代美術館で開かれた。今回の研究協議会で10回目になる。現在、会員は23館56名、そのうち21館45名が参加した。

平成14年度からの「総合的な学習の時間」の導入、完全学校週5日制の実施によって、地域社会が教育に果たす役割は大きくなる。美術館・博物館がこれまで取り組んできた課題の一つに学校教育との連携がある。近年、多くの美術館が子どもを対象とした展覧会、解説やワークショップなどに力を入れているのも教育の改革と関連して美術館教育の充実が課題となっているからである。今年度の研究協議は「美術館と学校現場」をテーマとし、教育改革の現状と美術館教育の課題について理解を深める機会とした。

第1日目は「学校教育と美術館」と題して、札幌市立大通小学校長・越智英昭氏が完全週5日制

とゆとりの教育、「総合的な学習の時間」の現状、体験学習の場としての美術館への期待などについて話された。情報の提供、子どもの課題に応える事業内容、移動美術展など具体的に学校現場からの要望が聞くことができた。磯崎（南部）亜矢子・西村計雄記念美術学芸員、柴勉・道立函館美術館学芸課長、瀬戸厚志・釧路市立美術館学芸員による事例発表の後、特に鑑賞学習を中心に学校教育との連携について討議が行われた。

2日目のプログラムは、平成13年4月に設置された「道立美術館等活性化検討会議」の中間まとめ、平成14年度から始まる「美術館等ネットワーク促進事業」（移動美術館と市町村立美術館・私立美術館の展覧会等への協力）についての説明（文化課文化施設係長・田中裕司氏）のほか、日頃の問題についての討議を行った。

(北海道美術館学芸員研究協議会幹事・浅川泰)



## 大津・十勝川学会を設立

去る2月9日(土)、豊頃町える夢館を会場に「大津・十勝川学会」の設立総会が開催されました。総会には、道内各地から会員約90人が出席、設立準備会長の君尹彦(道教育大学札幌校教授)のあいさつの後、西本豊頃町長の来賓のあいさつがあり、議事に入りました。議長に後藤秀彦浦幌町立博物館長を選出、佐藤隆則ふるさと十勝代表から設立に至る経過説明があり、会則、事業計画、予算を原案のとおり可決、次に役員選挙を行い、次の方々が役員に選出されました。

会長：君尹彦、副会長：太田善繁・斎藤義教、事務局長：岡庭義行、幹事：白木沢旭児・佐藤宥紹・後藤秀彦・内田佑一・中井松雄・佐藤隆則・菅原裕一・石塚周二、監事：若原敏光・赤澤公鷹、顧問：井上寿・木呂子敏彦・美馬勲

この学会は、十勝発展の起点となった大津の歴史や風土を調査するとともに大津を河口とする十勝川流域の歴史的経過などを調査研究することを目的としたもので、インターネットによる情報発

信や研究紀要・連絡紙などの発刊、生涯学習講座などの開催などが予定されています。

また、総会終了後、東北芸術工科大学東北文化研究センター助教授菊地和博氏を招いて記念講演会が開催されました。演題は「東北学への挑戦」で、東北文化研究センターがこれまで歩んできた諸活動について触れた後、今後の動きとして①東北の歴史文化の研究・交流ネットワークづくり、②地域と大学を結ぶ「地学連携事業」の多面的展開、③センター図書館の充実、④水上能舞台の企画・運営を通じた芸術文化創造活動の推進の4点を上げられ、「地域学は地域の自立を志向する」ことを強調されました。

このことは、かつての十勝の博物館関係者が中心となって行った『十勝大百科事典』の編集理念であった「十勝学の創出」とも合い通じるものがあり、学会自体の理念としても共有できるものであることを印象づけました。

なお、この学会の事務局は豊頃町教育委員会(中川郡豊頃町茂岩本町166番地)に置かれています。  
電話01557-9-5801 ファックス01557-9-5803  
(浦幌町立博物館長 後藤秀彦)

## 石狩・後志・空知博物館等 連絡協議会エリア紹介 しりべつミュージアムロード

一滴の水が流れを集め、大地を潤し、人びとの生活に活力と滋養を与えながら大海に注ぐ、あたかも川の流れに沿ったように、山から田園、そして海へと美術館、文学館、郷土資料館が点在する羊蹄山麓から日本海エリア。それを、しりべしミュージアムロードと呼んでいます。

当初、ニセコ町有島記念館、岩内町木田金次郎美術館、荒井記念美術館、そして真狩村国松登ギャラリーを結ぶルート設定でした。やがて、共和町西村計雄記念美術館、倶知安町小川原脩記念美術館、喜茂別町中山峠森の美術館が相次いで開館するに至って、変化に富んだ、特色ある施設が存在する地域として脚光を浴びるようになってきました。

平成12年、それぞれの施設に勤務する学芸員が知恵と力を共有し、さらに地域の個性を活かしながら博物館活動を実践して行こうとの趣旨から研究会が発足しました。その土地の特色、施設の個性をもっとクローズアップしながら、施設間の

連携を関連付けよう、と定期的に会合を開いております。単独館が一年を通じて、さまざまな活動を展開するには限界があります。また、そこにある素材を十分に活かしていきっていないという反省もあります。そんな中で「一緒に展覧会やろうか」、それが始まりだった様な気がします。

木田、西村、小川原の三人の画家。それぞれがそれぞれのスタイルで独自の活動を行ってきた個性の強い画家ですが、奇妙な糸で結ばれております。土地の素材と施設の個性を活かそう、それが三館合同の企画展示の発想です。木田金次郎の「海」、西村計雄の「田園」、そして小川原脩の「山」と3つの美術館で同時に開催される素描展は7月2日から始まります。

(小川原脩記念美術館 矢吹俊男)

## 館 園 紹 介

### 北海道海鳥センター

北海道海鳥センターは1997年4月に環境庁（当時）と羽幌町、北海道によって建てられ、海鳥を対象としたものでは日本ではじめて、かつ、これまでのところ唯一の施設となっています。

そして開館以来、大きく三つの側面をもって機能しています。

#### (1) 調査研究 Research

種の保存法に基づき、天売島で繁殖するウミガラスをはじめ、エトピリカやチシマウガラスなど希少海鳥類を調査研究、保護増殖にあたる責務があります。これまでのところ、天売島における海鳥群集基礎調査（センサス）がおもな仕事となっています。国内外の海鳥研究者と連携しながら進めています。

#### (2) 普及啓発 Education

観察会や各種講演会をセンター友の会や公民館と連携しながら開催し、環境学習を推進しています。今後は地元の学校教育や生涯学習において、どのように環境教育をおこなっていくかが課題です。新年度からは本格的に総合学習も始まり、学校が完全週休二日制となることから、これまで以上に児童・生徒への対応が求められています。

展示では、エコツーリズムの観点から来館者に情報提供をおこなっています。

#### (3) 情報受発信 Information

一般の方々のもとより、マスコミや国内外の研究者からさまざまな問い合わせがあります。

これらの側面に加えて、傷病鳥保護も大きなウェイトを占めつつあります。幸いなことにボランティアの人たちにより、とくに普及啓発や傷病鳥の面では大きくご協力いただいています。しかし、ボランティアの方々とは基本的にgive&takeの関係で成り立つものであり、生涯学習の観点に立ったセンター側の視点も必要です。

さて、わざわざ建物を訪れなくても、海鳥について学べる北海道海鳥センター”別館”があります。住所は<http://www.seabird.go.jp>、そうです、インターネットのホームページです。

民間企業では早くからインターネットの有効性に目をつけ、利用してきましたが、道内博物館施設ではどのくらい活用されているのでしょうか。

センターでは2000年2月15日から運用を開始して以来、海鳥というマイナーな分野にも関わらず非常に多くのページアクセスがあります。2001年3月から2002年2月までの一年間（365日）で、ページへの全リクエスト数は110842（一日あたり304ページ）となっています。”来館者”に相当するホスト数も15155（一日あたり42）と、実際の来館者二万人に匹敵する規模があります。

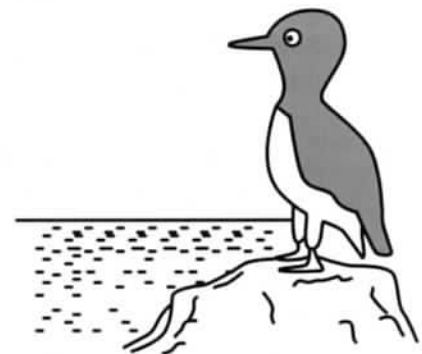
ホームページは月に1~2回を目安に更新するようにし、なるべく最新の情報提供に心がけていますが、環境省系の施設はなぜか？どこも人が少なく、私も調査と施設管理をかけた上で作成しています。忙しい時期には、月一回程度にとどまることもあり、訪問者の要求には十分に対応できていないのが現状です。

それでも、研究者から小学生まで、さまざまな方からいただくメールに励まされながら、”別館”の拡充につとめています。また、道北の自然情報を交換するメーリングリストなどもあわせて管理・運用していますが、春と秋にどっと入ってくるメールは季節の移ろいがわかって楽しみのひとつになっています。

（北海道海鳥センター 研究員 小野宏治）



海鳥（ウトウ）の巣穴を模したトンネルで遊ぶ子供たち



## 事務局日誌

- 平成13年  
10月25日 ・第2回役員会（伊達市）  
・ミュージアムマネジメント研修会（伊達市）
- 10月26日 ・学芸職員部会へ活動助成金送付
- 11月 2日 ・日胆地区博物館等連絡協議会へ活動費助成金送付
- 11月 9日 ・平成14年度北海道博物館協会表彰申請に関する関係書類を各館に発送
- 11月14日 ・『北海道の博物館』特別会計を解約し、学芸職員部会宛てに送付  
・日本博物館協会へ支部助成金交付申請
- 11月15日 ・第40回北海道博物館大会報告書作成
- 11月21日 ・会費未納者に会費請求書を送付
- 11月27日 ・道博協ニュース第73号の原稿依頼
- 12月 4日 ・網走管内博物館連絡協議会へ活動助成金送付
- 12月28日 ・日高町教育委員会に団体会員加盟申込書送付
- 平成14年  
1月29日 ・日高町山脈館団体会員入会
- 1月31日 ・北海道立旭川美術館より、平成14年度北海道博物館協会表彰に、同館のボランティア常磐会の表彰申請受理
- 1月29日 ・「道博協ニュース」第73号を各会員に発送
- 2月 2日 ・北海道立オホーツク流氷科学センターより、平成14年度北海道博物館協会表彰に、同館友の会初代会長 山原良一氏の表彰申請受理
- 2月 5日 ・北海道青少年科学館連絡協議会へ研修会補助金送付  
・各博物館等連絡協議会等へ、日本博物館協会より協力依頼があった「国際博物館の日」事業実施協力依頼を送付
- 2月13日 ・平成14年北海道博物館協会表彰の申請があった、2件の申請書を表彰担当役員に送付（後日、電話にて表彰の可否を確認）
- 2月19日 ・平成13年度第3回役員会の開催通知を送付
- 2月26日 ・北海道美術館学芸員研究協議会へ活動助成金送付  
・北海道博物館協会会員証を各会員に送付
- 3月 5日 ・上富良野町小さな貝の博物館より、団体会員入会の申請（平成14年4月から

入会)

- 3月 8日 ・学芸職員部会役員就任依頼を各館園長宛て発送  
・平成13年度第2回学芸職員部会役員会開催通知および派遣依頼を、各館園長および役員に送付

## 新入会員の紹介

平成13年度、次の団体と個人が新たに会員となりましたので、お知らせします。

- 団体会員** 北海道海鳥センター（羽幌町）  
阿寒町教育委員会（阿寒町）  
日高山脈館（日高町）
- 個人会員** 茶木富美雄（恵庭市）  
佐藤 一夫（苫小牧市）  
片山 正彦（札幌市）

## 事務局からのお知らせ

平成14年度北海道博物館大会は平成14年7月11日、12日の両日、札幌市の北海道開拓の村を会場として開催することになりました。大会テーマ、シンポジウム等については、ただ今検討中ですが、詳しくは「道博協ニュース」第75号でお知らせします。数多くの参加をお願いいたします。

## 会費納入のお願い

多くの会員からは平成13年度の会費を納入していただいております。しかし、平成12年度および平成13年度の会費をまだ納入されていない会員がおられます。北海道博物館協会の事業は会員から納入されます会費で運営しておりますので、速やかな納入をお願いいたします。

## 各種調査についての協力のお願い

平成14年度の各館・園の主な展示会と普及事業に関する調査を行います。近日中に各館・園に調査表をお送りしますので、皆様の協力をお願いいたします。また、平成14年度は「北海道博物館協会加盟館園等現況」の刊行年にあたります。その館園現況を発行するための調査表も会員の皆様のもとにお送りしますのでご協力をお願いいたします。